

# 大野城市の文化財

< 第 41 集 >  
大野城市の養蚕

---



2 0 0 9

---

大野城市教育委員会

## 序

大野城市を100年もさかのぼると、そこには大野村と呼ばれた農村がありました。農業や養蚕を生業として多くの人は暮らしていました。しかし、先の大戦や近代化の嵐など様々な変化の中で、次第にこれらの産業は姿を消していきました。

養蚕とは一体何だったのでしょうか。

今回で41集となります「大野城市の文化財」では、これらについて迫りたいと思います。今では養蚕について語れる人はほとんどいません。しかし、大野城市歴史資料展示室には、当時使われていた養蚕具が今も多く残されています。

この冊子が、当時の様子の一端を知る手助けになりましたら幸いです。

最後になりましたが、この編集にあたり貴重な養蚕資料を提供頂いたり、取材に応じて下さった方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月31日

大野城市教育委員会  
教育長 古賀宮太

## 目次

養蚕ってなあに？	1
1. 蚕の一生	2
2. 何ができるの？	4
昔の養蚕	
1. 桑の手入れと採取	6
2. 蚕への餌やり（給桑）	8
3. 熟蚕の拾い集めと上簇	10
4. 繭の取り入れ（収繭）	12
筑紫郡と大野村の蚕業	14
山十組製糸場（二日市工場）	16
二日市生繭市場	17
雑餉隈生繭市場	18
蚕業の衰退と現在	19
引用と参考資料	20

## ようさん 養蚕ってなあに？

養蚕とは、生糸（絹糸）を作るために蚕を飼育して繭を取ることで、繭は一本の糸でできていますが、これが何本も合わさって生糸になります。

蚕は蛾の一種で、幼虫を「蚕」、成虫を「蚕蛾」と呼びます。卵からかえり約 50 ~ 60 日でその一生を終えますが、養蚕では成虫となる前に作る繭を取り入れしますので、実際の一生はもっと短いものになります。

養蚕は、4000 年位前ととても古くから行なわれたようで、東アジアの山野に生息する「桑蚕」という虫に始まりました。野生の桑蚕を飼いやすくし、より多くの生糸をとるため人間が育てたものが蚕です。ですから桑蚕は今でも自然に暮らせますが、蚕はそうはいきません。このことから「蚕は人間が世話しないと育たない虫の家畜」という人もいます。



蚕の繭（1つの大きさは3～4cm位です）

## 1. 蚕の一生

1 頭の雌の蚕蛾が生む卵は約 500 個です。とても小さい虫ですが、蚕を育てる人は牛や馬を飼う人と同じように「頭」を用いて数え、大切に育てました。

蚕の卵は 11 ~ 14 日でふ化します。蚕は桑の葉を食べますが、始めは特にやわらかい新葉を与えました。その後、成長するにつれ食欲旺盛になっていくため、広い場所とたくさんの葉が必要となります。一生のうちで一番食べる時期には、その葉を食べる音は、「雨が降る音のようだ」といいます。こうして、幼虫は猛烈にエサを食べ続け、体内で繭を作る糸の元を作っているのです。

体長が 7 cm 位に育つと食べるのをやめ、口から糸を吐き出します。そして 2 ~ 3 日で繭が完成すると、もう幼虫の姿は外からは見えなくなります。しかし繭の中では成長を続け、その後 2 ~ 3 日で幼虫はサナギへと変化しています。一部の蚕は次世代の繁殖のために成虫になりますが、それ以外は繭を取るためサナギのまま一生を閉じます。

養蚕では、主に繭になるまで育てるので実際の飼育には 40 ~ 50 日を要しました。現在の技術では、一年中蚕を育てることも可能ですが、明治 ~ 昭和の初期ごろまでの大野城市周辺では、春・夏・秋・晩秋と年 4 回育てる事ができました。地域によっては最晩秋まで飼っているところもありましたが、実際は農家の本業（稲作、畑作など）との兼ね合いで、2、3 回飼う所が多かったようです。

\* ふ化した蚕の幼虫は、1 齢 ~ 5 齢までその成長過程で呼び分けられます。（右の図参照）

蚕の一生



卵のふ化



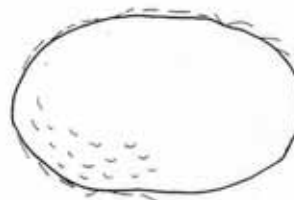
実際は2mm位です。  
1 齡幼虫 (毛蚕)



3 齡幼虫



5 齡幼虫



中でサナギになります。  
繭の形成



成虫の誕生 (蚕蛾)



うか  
羽化

\* 生まれたての1 齡幼虫の蚕には毛が生えています。その様子から毛蚕とも呼ばれます。

## 2. 何ができるの？

繭から糸を取るには、まず丸ごと茹で繭をほぐします。そして一本の糸を取るのですが、一本ではとても細い糸なので、何本かを撚り合わせて作ります。こうしてできた生糸や、生糸から織られた絹は、明治から昭和の初めごろまで日本の輸出品の第一位でした。

真綿（絹綿）も、繭から作られました。糸を取る前に羽化してしまった繭は、糸の繊維が短く切断されていて、糸を取るには向きません。そこで、この繭をよく煮てやわらかくし、1粒ずつ手で広げて作ります。昔は、真綿を布団や着物の中に入れて寒い冬をしのいだり、桶の穴をふさぐ詰め物にしたり、風邪を引いたときに首に巻いたり、生活に欠かせない大切なものでした。



生糸

\* 製糸工場で作られた糸は、上の写真のような束で出荷されました。



しろむく か した  
白無垢 (掛け下)  
代表的な花嫁衣裳 いしよ  
です。純白の生地 きじ  
で、婚礼に臨みま のぞ  
した。

ボンシン  
(綿入れ)  
真綿を中に詰  
めてあるので、  
暖かい着物で  
す。



## 昔の養蚕（明治～昭和中頃まで、今から100年～50年位前まで）

では昔の養蚕はどのようなものだったのでしょうか。

作業としては、大きく分けて4つの段階がありました。これを順に見てみましょう。

### 1. 桑の手入れと採取

蚕は桑の葉を食べます。そのため、養蚕は5月初旬、桑に新しい葉がついた頃から始まります。一般の農家では、桑の葉が茂る春から秋の間に蚕を飼いました。それぞれ飼う時期によって春蚕、夏蚕、秋蚕などと呼びました。春蚕を出荷してすぐ夏蚕を飼うときは、桑の発芽を促すために剪定しました。

桑摘みは、子どもも手伝いました。桑テボ（右のページの写真）と呼ばれる桑摘籠に紐を掛けて、後ろに背負って作業しました。日中に摘むと葉がしおれやすいので、朝早く起きて摘みました。蚕もかえってしばらくは小さいので小食ですが、幼虫も後期になると大量に桑の葉を食べるので、桑を枝ごと採取して与えました。

桑は、とても生命力の強い木で生長も早く、放っておくと15mくらいの大木になります。そのため、人が摘みやすいよう15mくらいの高さにそろえておくことは大事な仕事でした。

今のおま大野城市役所の周辺には、当時一面の桑畑が広がっていました。お年寄りの話によると、桑の実あまは甘酸っぱい味がして、子供の頃はおやつ代わりに食べたという人も多いようです。



蚕が食べる桑の葉





桑籠と桑テボ<桑摘籠>

左から桑籠（幅 60cm、奥行 45cm、高さ 48cm）、桑テボ・小（直径 39cm、高さ 30cm）、  
桑テボ・大（直径 73cm、高さ 50cm）

\* 桑摘籠のような竹籠を九州、特に福岡県ではテボ（手<sup>て</sup>ボ）と呼んでいました。

## 2. 蚕への餌やり（給桑）

春蚕の場合、毎年5月ごろ卵がふ化すると蚕を飼育する場所「蚕座」に移し、細かく刻んだ桑の葉を与えます。このとき、柔らかい羽簾を用いて毛蚕を蚕座に掃き下ろすことから、蚕に初めて給桑する行事は「掃立て」と呼ばれるようになりました。今でも、一部の地方の農協や皇室の御養蚕所などでは養蚕をしていますので、この「掃立て」という行事をテレビや新聞で目にされた人もいることでしょう。

2歳くらいまでの小さい蚕を「稚蚕」といいますが、飼育するときは蚕箱（右ページの写真上）などを使いました。蚕箱は木製で、保温や桑の葉の乾燥防止、蚕病の予防などに役立ちました。また、稚蚕には柔らかい葉を小さく切ったり、包丁で刻んだりして給桑しました。この時使う包丁や俎板は、桑専用にしてました。蚕は敏感な生き物で、他の食材の匂いなどがつくのを嫌うからです。また、雨に濡れた桑の葉は蚕が食べにくいので、水気をよく拭き取ってから与えました。成長するにつれて大きな葉を与えますが、少し大きくなった蚕は竹バラと呼ばれる蚕籠（右ページの写真下）などで飼育しました。



大きな桑の葉をモリモリ食べる5歳幼虫の蚕（体長6cm位）



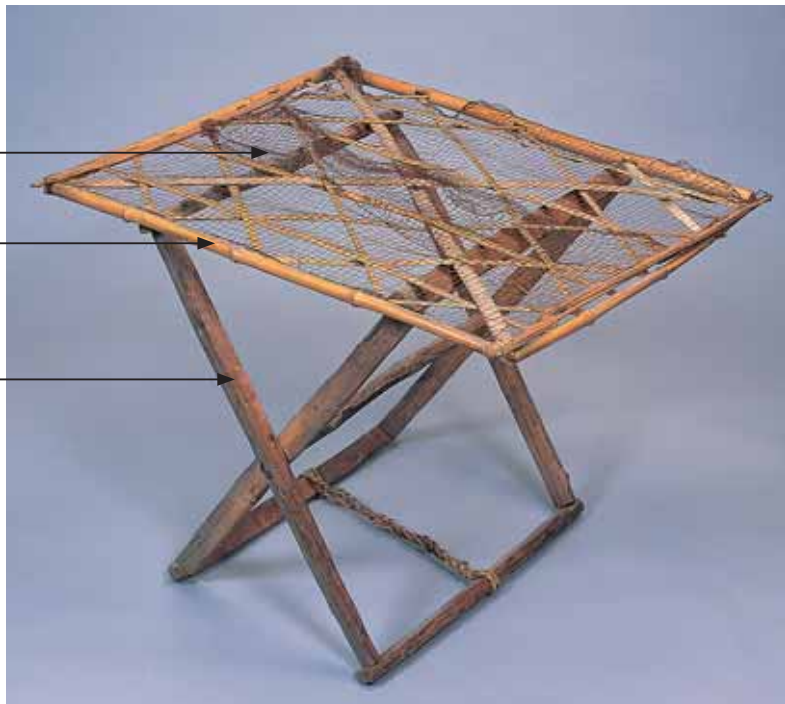
蚕箱（幅95.5cm、奥行72cm、高さ10.4cm）

\* 稚蚕（1～2 歳の幼虫）は蚕箱などで育てられました。

かいにあみ  
蚕網

竹バラ（蚕籠）  
（77cm × 93cm）

くわくれだい  
桑給台  
（高さ 74cm）

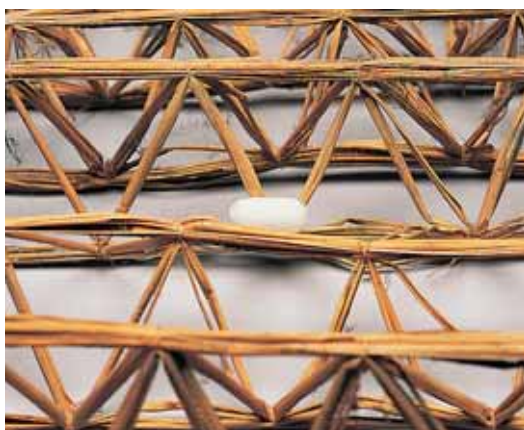
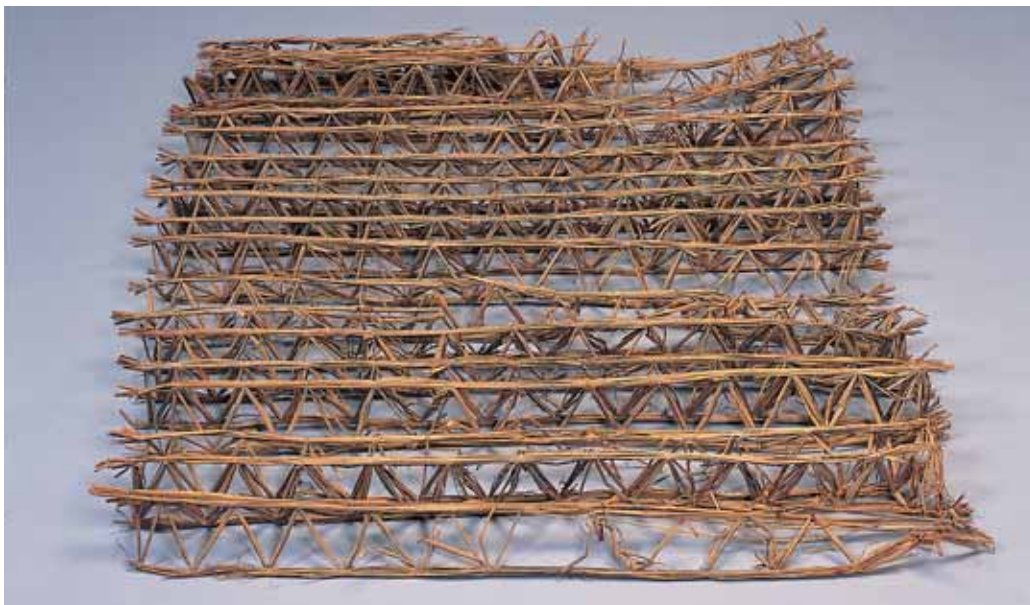


\* 3 歳以上の幼虫は竹バラが蚕座となりました。実際は、この上に筵や蚕座紙を載せました。

### 3. 熟蚕の拾い集めと上蔭

5 齡幼虫になった蚕は 10 日もすると、桑を食べなくなります。すると、体は<sup>あめいろ</sup> 鉛色に透けて<sup>ちぢ</sup> 縮みます。この状態の蚕を“熟蚕”といい、繭を作る準備ができたものです。この時、蚕の体重は生まれたときの約 1 万倍になります。そのままの蚕座にいると<sup>ふん</sup> 糞などで繭が汚れたり、繭の形を丸く作れなかったりするので、<sup>まぶし</sup> 蔭（下の写真）という繭つくり専用の場所に蚕を移します。これが、“上蔭”と呼ばれる作業です。

蔭は、初め<sup>わら</sup> 藁で作られていましたが、昭和に入ると<sup>かいてんまぶし</sup> 回転蔭（右の写真）という蚕を 1 頭ずつ入れるのにちょうどよい大きさのマス目で区切られたボール紙製の枠も使われ出しました。



<sup>わらまぶし</sup> 藁蔭 <sup>かいてんまぶし</sup> 改良蔭  
藁蔭（改良蔭）

（幅 78cm、奥行 127cm、高さ 7cm）

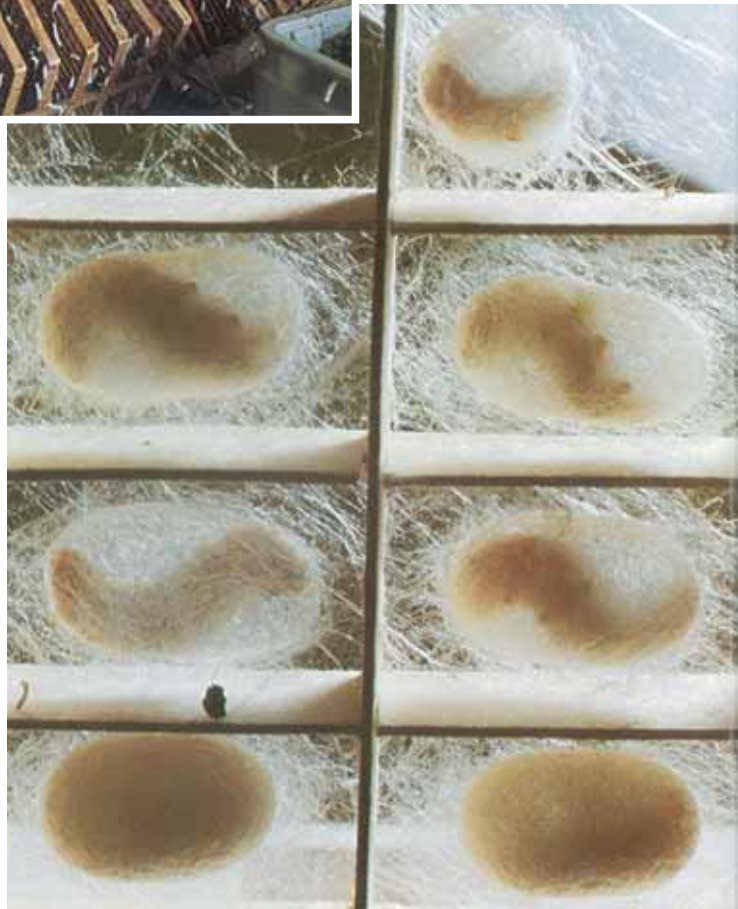
三角の部分に一頭ずつ蚕を入れます。

藁蔭の中で繭を作った蚕（イメージ）



かいてんまぶし  
回轉族

白く見えているのが蚕です。  
蚕は上にあがる習性があるので、  
上の枠が埋まってきたら、この  
族を回轉させて、下の枠を上  
にします。



回轉族の中

上の段のように、繭の作  
り始めでは蚕の姿が透け  
て見えていますが、完成  
が近づくと、下の段のよ  
うに見えなくなります。

#### 4. 繭の取り入れ（しゅうけん収繭）

蚕は、上簇して一晩明けると糸を吐き始め、2～3日で繭を作ります。さらに2～3日後、繭の中で脱皮するとサナギになります。サナギの期間は約10～12日です。繭を収穫する時は、一週間後に簇から外します。これが遅れると、繭の中でサナギは成虫になり、繭を破って外に出てきます。

取り出した繭は、てまわ手廻しのけぼとり毛羽取（下の写真）で細かな毛羽を取りました。毛羽取の上部、すのこ簀子状になっている所に繭をのせ、左手で繭を送りながらハンドルを回すと、ハンドルについた細い鉄棒が回転し、繭の毛羽を巻き取ってくれます。このようにして整えた繭は、なががいん仲買人に売られたり、製糸工場に直接持って行って現金に換えました。

規格外の繭は、良い値で売れないので自家用として使われました。1つの繭に2頭のサナギが入っているものはたままゆ玉繭・ふたごまゆ双子繭といい真綿にしました。また、蚕の小便で汚れたものをヨゴレ繭、形の崩れたものはクズ繭といって、これらをつむ紡いで家族の者の着物や客用の布団地などを作りました。



毛羽取（横幅31.5cm、奥行51.5cm、高さ18cm）

繭の表面についた毛羽は、細く切れやすい糸です。製糸には向かないので、出荷の際は毛羽取で取り除きました。

## 糸を繰る道具



糸車  
(幅 84cm、奥行 54.5cm、  
高さ 82.5cm)  
糸に撚りをかけ、強く丈  
夫にする道具です。



座繰 (幅54cm、奥行13cm、高さ40cm) と小枠 (写真左、直径16.5cm)  
家庭で糸を繰る時には、座繰と呼ばれる糸繰器が使われていました。ハンドルを回すと、小枠  
が回転して糸を巻き取ります。

## 筑紫郡と大野村の蚕業

右の図は大正 12 年（1923）における筑紫郡の蚕業地図です。筑紫郡には現在、那珂川町しかありませんが、当時は大野村（現大野城市）も含まれた広い地域でした。

この図によると、大野村の収繭量は 12,344 貫（約 46.29 トン）で、筑紫郡の中では筑紫村（現筑紫野市の一部）と並び養蚕が盛んだったことがわかります。繭一個の重さを約 2 g と考えると、繭玉数にして 2,300 万個以上取れていたこととなります。では、いつからこんなに取れるようになったのでしょうか。

古くから養蚕は行われていましたが、筑紫郡で本格的に開始されたのは明治 15 年（1882）ごろであったようです。この年、大野村に朝倉郡より専門家を招き、これまで自然に繁殖するだけだった蚕を、薪や炭などの火力を利用し保温することで、蚕の良好な成長を促す方法を習います。そして、明治 18 年（1885）には朝倉郡から製糸教師を招き、座繰（13 ページ下写真）製糸を経営するまでに至ります。同年、筑紫村や太宰府町（現太宰府市）でも製糸場は設立され、輸出向けの生糸の生産を開始しました。しかし、座繰製糸の技術水準があまり高くなかったため、これらの製糸場は解散してしまいます。

明治 20 ～ 30 年代には、大規模な養蚕経営が行なわれませんが、蚕病の発生などの問題が起こり、生産量は減少します。このため、明治 37 年（1904）に筑紫郡内に 3 カ所の共同稚蚕飼育所が開設されます。蚕は、3 齢幼虫になってから養蚕農家に配られ、養蚕の生産性が高まりました。また、各戸に対して養蚕の指導も行なわれるようになり、技術の向上が図られました。

大正に入ると、一時期は福岡県の奨励もあり、特別に専用の蚕室を作る農家もありましたが、一般には普段使う部屋を片付け畳上げし、飼育部屋に当てました。床に「イロリ」を作り、養蚕する場所を暖房しました。

大野村としても、当時第一の副業と言われていた養蚕の普及に力を入れ、養蚕によって農家の収入を上げようとしていました。大正 14 年（1925）大野村村議会では、福岡県蚕業試験場の誘致を決めます。そして、現曙町に試験場は完成し、福岡県下の養蚕指導の拠点となりました。

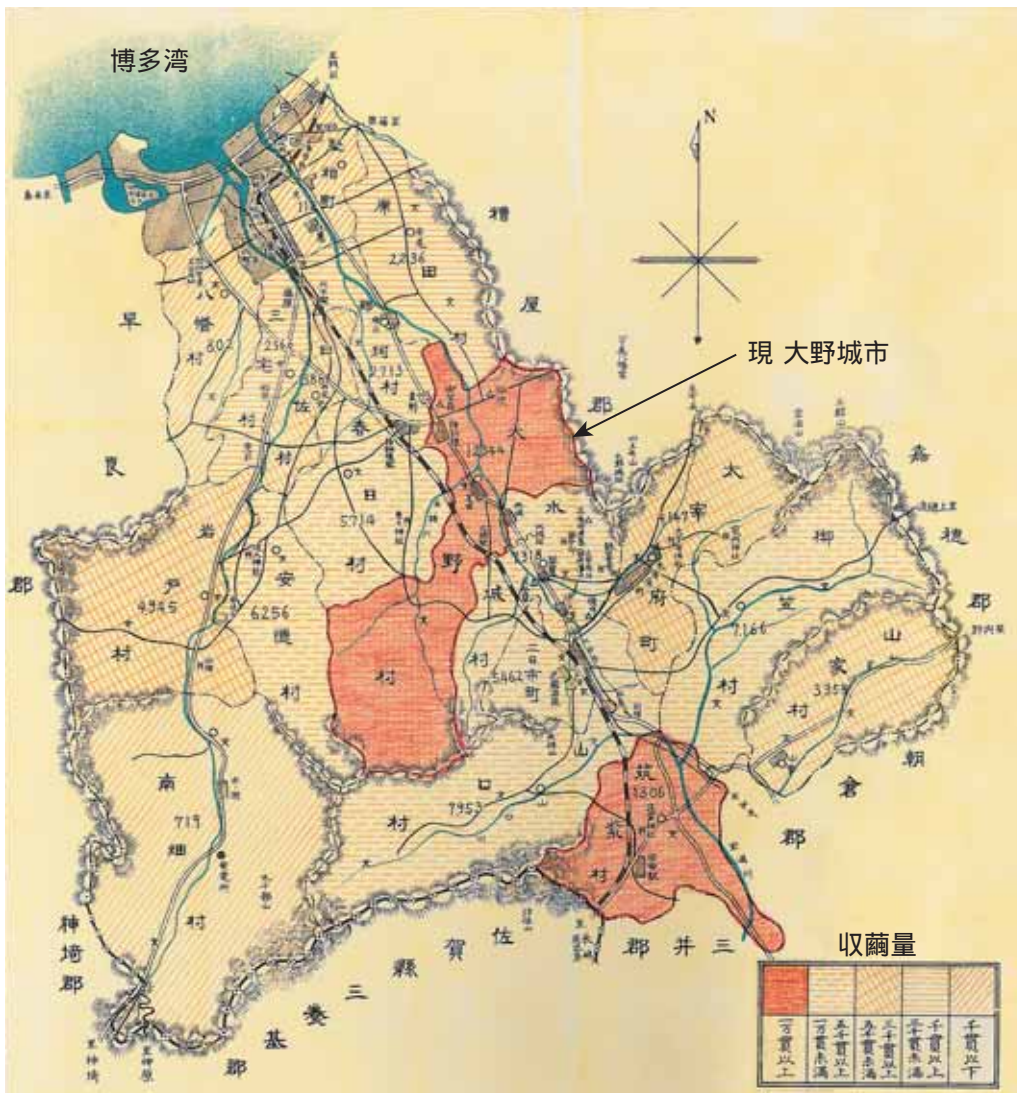
『筑紫郡の蚕業』によると、大正 3 年（1914）に春蚕を手がけた農家は 86 戸あったのに対し、大正 12 年の春蚕では 235 戸に伸び、その数約 3 倍となります。昭和 2 年（1927）農家の総数が 495 戸であったことを考えると、実に多くの農家が養蚕に携わっていたことがわかります。

その後、昭和 10 年（1935）試験場に付設していた福岡県繭検定所が独立し、蚕業試験場の隣に別の庁舎を建てています。

このように、明治から昭和の初期にかけて、少しずつ養蚕の技術や取り巻く環境は進歩していき、蚕業はその最盛期を迎えました。



大正12年筑紫郡の蚕業地図



筑紫郡蚕業組合連合会『筑紫郡の蚕業』共文社 1924 年を一部改変

山十組製糸場全景（二日市工場）



やまじゅうぐみ  
山十組製糸場（二日市工場）

上の写真は、大正3年（1928）二日市に建設された山十組の製糸工場です。

『筑紫野市史』によると、当時の様子が次のように書かれています。

「山十組は、長野に本社を置く大製糸会社で、全国に15、6の工場を展開していました。これまで座繰による手動で製糸していたのに対し、工場では機械製糸が取り入れられました。これは、当時の地域社会や経済にも大きなインパクトを与えました。二日市に工場が誘致された理由は明らかではありませんが、当時の筑紫郡では養蚕が盛んであったことが理由として考えられます。さらに、二日市には鉄道の鹿児島本線が通じており、物流に都合がよかったことも挙げられるでしょう。二日市工場の大正5年（1930）の年間消費原料繭は約250万貫（9万3千トン）に達し、福岡県下はもちろん大分、山口、佐賀、熊本、長崎などからも繭を購入していました。ここで働く労働者は約1,150名もあり、当時としては大変大規模な事業であったことがうかがえます。」

二日市生繭市場の光景（大正12年春蚕）



ふつがいちせいけん  
二日市生繭市場

上の写真は、大正12年春蚕の二日市生繭市場です。

『筑紫郡の蚕業』によると、市場に出された生繭は1、2、3等に評価され、中のサナギを殺すため“乾繭”という処理を施しました。その後売られた繭は、熊本、島根、滋賀などの遠方の製糸所に出荷されていきました。

また、『筑紫野市史』によると、次のことがわかります。

「この繭市場は明治期の終わりに設立され、それ以来繭取引の中心地として発展しました。開設は春、初秋、晩秋、最晩秋の年4回でそれぞれ一週間ほど開かれました。当初は3社ほどに過ぎなかった購買者は次第に増え、山十組のほか片倉組（現片倉工業）、郡是製糸（現グンゼ）などの大手の製糸会社も参加するようになりました。取引高は年々増加し、繭はこの近辺から広がって佐賀県の一部、三井郡、朝倉郡、嘉穂郡、糟屋郡などからも供給されるようになります。」

雑餉隈生繭市場の光景（大正13年晩秋蚕）



ざっしよのくま  
雑餉隈生繭市場

上の写真は、大正13年晩秋蚕の雑餉隈生繭市場です。ここは、前のページで紹介した二日市市場から別れてできた市場です。写真に写っている大八車（代八車）などで、繭は運ばれました。

『筑紫郡の養蚕』によると、二日市市場での取引が年々増加していくと、二日市市場では足りなくなってきました。また、取引の増加により二日市市場での搬出入の不便を訴える人が出てきました。これらの諸問題を解決するため、大正7年（1932）雑餉隈に新たな市場が開設されました。これにより那珂郡・な席田郡（現福岡市の一部）の人々は、この市場に出荷するようになりました。

## 養蚕業の衰退と現在

このように、長い間続けられていた養蚕ですが、第二次世界大戦が始まると衰退していきます。桑畑は、より経済性のある作物に取って代わられました。養蚕をする農家はほとんどいなくなり、昭和の中頃になると急速な都市化により農家自体も激減します。

大野城市内では、今も多少の農業は行われていますが、農地のほとんどは宅地化されました。福岡県繭検定所はその後移転し、その跡地は大野城市役所の一部となりました。明治から昭和の初期までは盛んに行われた、この地の主要な産業であった養蚕の足跡を記念して、今は一本の桑の木が植えられています。また、養蚕業に関わりのあった方々から歴史資料展示室に寄せられた養蚕具は、昔の生業を物語る生きた資料となることでしょう。



植樹された桑の木（市役所新館そば）

## 引用と参考資料

筑紫郡蚕業組合連合会 1924 年『筑紫郡の蚕業』共文社  
太宰府市 1993 年『太宰府市史』ぎょうせい  
日本民具学会 1997 年『日本民具辞典』ぎょうせい  
木内信 1998 年『カイコでつくる新産業』農文協  
木内信 1999 年『カイコの絵本』農文協  
筑紫野市 1999 年『筑紫野市史』凸版印刷株式会社  
石井昭 2002 年『かえるよ！カイコ』リブリオ出版  
日本真綿協会 2004 年『真綿 蚕からのおくりもの』農文協  
中村守 2004 年『皇后さまの御親蚕』扶桑社  
大野城市 2004 年『大野城市史』凸版印刷株式会社  
岸田功 2005 年『カイコ まゆからまゆまで』あかね書房

### (写真と図版出典)

P 1 蚕の繭；岸田 2005、P2  
P 3 卵のふ化、成虫の誕生；岸田 2005、背表紙  
P 8 蚕の 5 齢幼虫；岸田 2005、背表紙  
P11 回轉簇、回轉簇の中；岸田 2005、P32、P37  
P15 筑紫郡蚕業地図；筑紫郡蚕業組合連合会 1924、付図  
P16 山十組製糸場；筑紫郡蚕業組合連合会 1924、図版  
P17 二日市生繭市場；筑紫郡蚕業組合連合会 1924、図版  
P18 雑餉隈生繭市場；筑紫郡蚕業組合連合会 1924、図版

大野城市の文化財

第41集

平成21年3月31日

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印刷 福岡印刷株式会社  
福岡市博多区東那珂1丁目10番15号

